鹿苑寺金閣と川端康成

その一

山本壽夫

一

京の名刹鹿苑寺金閣が心なき一寺僧の放火により炎上焼亡したのは昭和二十五年七月二日のことである。既に法隆寺金堂を失つてゐた世は文化の末世ここに至れりと澆季の世に今更の如く驚愕し嗟嘆したのである。京の観光を語る者は口調よく金銀合せて金閣・銀閣と併称し、京の歴史文化を偲ぶ者は東山文化の象徴として鹿苑寺にふれぬ者は無かつたのであるから、世俗的世間においても、学術の世界に於ても世を挙げて、この惨事に対する驚愕の度が大きかつたのは当然のことであらう。さればこの世上好個の話柄は時を移さずジャーナリズムの取り上げる所となり、それぞれの専門的観点からの論議が紙上を賑やかに彩つたのである。文壇においてもまたこの事件を恰好の素材として取り上げる者が現はれるに至つたのも時の勢であつた。例へば三島由紀夫には長編金閣寺があつて、金閣といふ美的建造物の炎上に触発されつつ、とるにも足らぬ若僧の狂はしき供述を全く換骨脱胎して事件の核心をなす素材として取り上げこれを深刻な美の問題として提起して、これと取りくみ問題作をなしてゐることは周知のことであらう。又水上勉にも五番町夕霧楼の作あつて、この金閣炎上に至る経緯、不具者の閉ざされた世界を素材として、淡く作品を彩つてゐることは世の知る所である。それに、小林秀雄もまた犯人が一種の狂人といふ観点からこれに注目しユニークな作をなしてゐるのである。金閣焼亡といふ作品がこれである。とにかく世間を騒がした一大事件であつたのである。しかるに川端康成はその作品においてはこの事件にまつたくふれる所がないのである。川端はその作品に三島がするやうに際物的素材・時事問題的素材をとくに生のままに近い状態で取り入れるといふことを好まぬし、大衆読者の目を意識するなどとは全くとんでもないことであつて金閣炎上など作品に影を落さぬのはむしろ当然であらう。まことに「私は西洋の文学の新しい動きを追うのが新しいとも思わぬし、時代の新しい動きを追うのが新しいとも思わない。」（古都など）なのである。しかし川端康成は心ずしも全然かうしたものを作品に入れないとは云へないのである。二三その例をとつてみても例へば「虹いくたび」に

「麻子さんがこちらにいらつしてから知事の選挙があつて、社会党の候補が當選しましたね。新聞で見たんだが、新知事は共産党員や労働組合員の赤旗に迎へられて、府廳入りをしたんでせう。今年のメエ・デエには、知事と市長とが行列の先頭に立つさうですね。桂離宮や御詠歌の京都には、そんなところもあるんだな。」

「私たちのは旅行者の京都……」

「僕も京都に家が出来ても、やはりまだ、順禮歌を聞きたい方の旅行者ですね。」

「なつかしいものはなつかしいんですもの。」

とあるのや戦後の京都大学行幸時の同学会事件や、岡山にも関係が深いが、蓮博士で有名な大賀博士が二千年前の蓮の種の発芽に成功した事件、又徳川家の廟所改築移転にともなふ和宮墓所改葬の事件等深い詠嘆をもつて語られてゐるのであり、将軍家茂の写真の話などまつた

く神秘的でさへあるのである。これらの題材は実は一筋川端文学の根本にも触れる所があり、川端にとつては単なる小説の背景を彩る時事問題とは異り、川端の心奥深くしみ通るものがあると考へられるのであるが、いまこの問題については問はないこととしたい。とにかく川端も時事を取り扱はないのではないといふことだけはこれで明かである。にも不拘あれだけ世を騒がした金閣の焼亡については触れないのである。いや鹿苑寺金閣そのものにふれてゐないのである。

川端の京都によせる心情は人も知る所であらう。それは北條誠が次の如く川端の文を引用しつつ云ふ所をみても分るであらう。

この年月、つねに氏の心をとらえてはなさないのは、京都だといふことは、言えるだろう。

「東山熟友の如し」とは頼山陽の詩句だが私にも東山、西山、北山は熟友でもあるし「揺籃」でもあつた。

京都は日本のふるさとだが、私の村は現在茨木市にはいつている。京都と大阪との中間の山裾の農村で、その山を深くはいれば丹波である。村の景色に芸はないけれども、近くに「伊勢物語」や「徒然草」に書かれた所がある。藤原鎌足の遺蹟も隣り村にある。私の村もふくめた関西の自然の中核、象徴は京の山河で、私が京都の山河をふるさととするわけである。今は新幹線のひかりで沿線を味わうゆとりもないが、むかしは東京からの汽車が近江路にはいると、ああ、ふるさとに帰つたと、肌身になつかしさのよろこびがしみじみとしたものであつた。私は京の王朝の文学を「揺籃」としたとともに、京の自然のこまやかさを「揺籃」として育つたのであつた。（茨木市にて）

また「全集第十巻あとがき」にも左のような文章がある。

ところが私はその行き帰りに京都に寄つた。行きは花見時であり、帰りは四月の終りから五月の新緑のころであつた。殊に帰りは京都の宿に半月ゐた。行きも帰りも、急ぎの原稿を書くために京都へ寄つたわけなのだが、京都の風光と古美術とを見歩きもした。大徳寺へは三度行つた。孤蓬庵の井戸茶碗や高桐院の古名画も見られた。桂離宮には大方半日ゐた。博物館へ東福寺文化展を見に行つて―中略―明恵上人の「夢の記」の断簡を売りものとして見るのも私にはなつかしかつた。去年の十一月に広島へ行つた帰りも、私はやはり十二月の二十日ごろまで京都にとどまつて、浦上玉堂の墓や碑を見に行つたり古美術を見歩いたりしてゐた。広島の原子爆弾の惨害のあとを見聞した帰りに、古都の風光や古美術を見るのは、矛盾した自分であらうかと、去年の暮に思つてみたものだが、今年の春も思つてみた。しかし矛盾してゐるとは思へないし、やはり一人の私である。広島と京都とは今日の日本の両極端かもしれないし、そのやうな二つのものを私が同時に見てゐるわけであらうが、二つともよく見たいものである。古美術を見るのが趣味とか道楽とかでないのは言ふまでもない。切実な生命である。―下略―

氏の生まれ故郷は大阪である。しかし氏は両親が死んでから移つた茨木をふるさととするのだ。その茨木も、当時の呼び名からすれば、大阪府三島郡である。京都であるよりは大阪だろう。大阪と京都の中間にある茨木を、世間の常識を破つて京都に結びつけようとするのは、氏の愛なのか執念なのか。年とともに日本の古典に帰つて行く氏のあこがれや姿勢がうかがえはすまいか。今度のノーベル賞さわぎのときも氏は三度、京都をたずねた。

これで既に明かである通り川端にとつては、京都は日本のふるさとであり、私のふるさとであり、揺籃であり、より切実には生命なのである。まこと彼の名だたる小説も近来は日本のあはれであり、いはば京の心であるのはいふまでもないが「僕は日本の山河を魂として君の後を生きてゆく」（横光利一弔辞）といふのであつてみれば、その舞台を京都にとるもの多きは当然といふことになる。婦人公論に連載した「日も月も」、今度のノーベル賞受賞を記念して松竹で映画化された。光悦寺の茶会ではじまり茶会で終る小説である。「虹いくたび」にはかう書いてある。

銀閣寺を出て、山ぎはの路を行くと法然院の黒門があつた。池のあやめの返り

花は見られなかつたし、名木散り椿もまだ咲いてゐなかつたが、もみぢの庭の白い砂に、水の音があつた。寺には椿が多く、住職は椿の俳句を多く作つてゐるといふことだつた。法然院に近い住蓮山安楽寺には、松虫と鈴虫との五輪の塔がある。後鳥羽院の寵姫、鈴虫、松虫と法然上人の弟子、安楽、住蓮との物語は百子も知つてゐた。そのために安楽、住蓮の二人の僧は斬られ、師の法然は佐渡に流されたともいふ。今は寺もさびれて草のなかだ。」

ここに銀閣寺とともに後鳥羽院の御名の見えることも注意しておかなければなるまい。勿論「虹いくたび」には知音院大徳寺や光悦寺、三条も桂離宮も嵐山・高尾も出てくる。それにまた小説中の聚光院の門を出て光悦寺に行く道は南下して金閣寺に至るのであり、この道順は通常の観光コースとさへなつてゐる。が金閣の名は見へないのである。金閣は完全に無視されてゐるのである。[註一]「ヒロイン千重子は『真直ぐに、きれいに立つて』いる娘である。ちようど北山杉のように—。そしてこの北山杉の村の情景は、この小説に四回も出てくるがそれはこの小説の象徴ともいうべきものである。」と山本健吉が解説する「古都」は彼の云ふ所によればまた

註二

この小説は京都を舞台にして、一方では京都の年中行事絵巻が繰り拡げられ、他方では京都各地の名所案内記をも兼ねている。全九章のうち、「春の花」「尼寺と格子」「きものの町」は春、「北山杉」「祇園祭り」は夏、「秋の色」「松のみどり」「秋深い姉妹」は秋、「秋深い姉妹」の終りごろから「冬の花」は冬である。そして、年中行事としては、花見、葵祭、鞍馬の竹伐り会、祇園会、大文字、時代祭、北野踊、事始めなどが書かれ、名所や土地の風物としては平安神宮、嵯峨、錦の市場、西陣、御室仁和寺、植物園、加茂川堤、三尾、北山杉、鞍馬、湯波半、チンチン電車、北野神社、上七軒、青蓮院、南禅寺、下河原町の竜村、北山しぐれ、円山公園の左阿弥その他が描かれている。かつて馬琴の八犬伝が、舞台を多く江戸近郊に取り、そのことが江戸の読者たちの興味を掻き立てたように、これも京都に住む人、京都を知る人に、既知の風物に作中で出会うという快感をふんだんに味わせてくれる。これはある意味では、地理的、風土的小説といつてもよい。

のであるが、それでも金閣は顧みられてゐないのである。「美しさと哀しみと」においても嵐山や嵯峨、東山や賀茂川、西芳寺や知恩院と京の名所は幾多出ても遂に金閣は見られないのである。勿論「京都」「古都など」においても語られないのである。要するに熟友でもあり揺籃でもある東山西山北山と書いてもそれらを借景とする金閣は書かないのである。

二

金閣炎上については、既に述べた。しかし鹿苑寺金閣は一体如何なるものであらうか。先述の「茨木市にて」の書き出しは、

光悦会の終りの日のきのう（十一月十三日）、大佛次郎氏夫妻、狩野近雄氏夫妻、水上勉氏などと、光悦寺の四都の茶席をまわつた後、嵯峨の大河内山荘（大河内伝次郎氏の遺邸）を訪れ、詩仙堂に行つた。美しい京の秋の殊にめぐまれた美しい日和であつた。光悦寺のもみじも見ごろであつた云々

であるが、このなかの水上勉に五番町夕霧楼のあることは既に述べた。大佛次郎の長編「帰郷」は有名作であらう。[註三] 駒敏郎は

荒廃しきつた祖国に帰つて来た主人公守屋恭吾をあたたかく迎へたのは、焼けのこつた京都の町と古い寺々だ。「戦争の果てに日本に残つたのは実に京都奈良だけだといつてもよいのである。」町を歩く恭吾は、どこへ行つても目につく古道具屋や古美術商の店に、微笑する。戦争でさんざんになつたはずの日本人の生活の中に、平凡な器物に寄せる優しい心づかいがのこつていた。守屋恭吾をとらへた古い日本の魅力—それが戦後の京都の評価として定着した。

と云つて「帰郷」と「京都」を合せ説明する。それで「帰郷」の

龍門の滝、鯉魚石と立札に示して岩組に滝とはいえない水の落ちているところ

がある。その前にふたりは出ていたのである。楓が枝を差し伸べて明るいを影を地面に落していた。

「それで」

とゆつくり恭吾は言つた。

「お母さまは御健在なのですな」

自分の父親と信じている男の顔を、伴子は大きな目で見まもり、強く頷いて見せた。

とある所を取り上げて

註四

「帰郷」のクライマツクスである。

やはりこのドラマチツクな高潮は、金閣の庭がふさわしいようだ。

と帰郷と金閣を解説するのである。まこと題名の「帰郷」が示す如く、主人公恭吾の日本回帰が重要なテーマをなすのであれば、そのドラマの最高潮、最も緊張せる時点、娘との邂逅の場を金閣の庭にとるといふことは、金閣が守屋恭吾をあたたかく迎えた京都の町と古い寺々、守屋恭吾をとらへた古い日本の魅力の象徴として取り上げられてゐることになる。大佛次郎にとつては金閣はそのやうなものであつたに異ひないし、事実この小説にひかれて、金閣を訪れる観光客が急に増加したといふのである。ただしこの作書かれて二年後には金閣は炎上したのである。がここに一つの対照を見る、大佛と川端である。金閣は大佛にとつては古き日本の魅力であり、回帰すべきふるさとであつても、川端にとつては、さうではないのであらうか。あの金色燦然と燿くきらびやかさが川端の「哀しみ」にあはないのであらうか。「敗戦後の私は日本の古来の悲しみのなかに帰つてゆくばかりである。」（哀愁）といふ帰つてゆくべき日本古来の悲しみと金閣は程遠いのであらうか。もしさうであるとするならば、一体それはどういふことになるのであらうか。

三

一九六八年度ノーベル文学賞を受けた川端康成は十二月十二日、スウエーデン・アカデミーで「美しい日本の私―その序説」と題して記念講演を行なつた。これは恰好の時所を得て、川端文学の精髄を世界に向つて披瀝したことになる。この講演は先づ道元禅師の「本来面目」と題する歌と「雲を出でて我にともなふ冬の月風や身にしむ雪や冷たき」といふ明恵上人の歌をあげて、この歌につけられた明恵上人の長く詳しい詞書きを取り上げて、この歌の心を解説することによつて始まり、明恵・西行の交友にみられる東洋の虚空と道元の「本来面目」と題する四季の歌に認められる四季の美を歌いながら実は強く禅に通じたもののあることを述べて終るのである。明恵・道元にはじまり、明恵・道元に終るのである。従つてこの講演における明恵の姿は大きく位置は非常に重いといつてよい。それかあらぬか明恵の歌を

註五

「歌を詠むとも実に歌とも思はず。」（西行の言）の趣きで、素直、純真、月に話しかけるそのままの三十一文字で、いはゆる「月を友とする」よりも月に親しく、月を見る我が月になり、我に見られる月が我になり、自然に没入、自然と合一してゐます。暁前の暗い禅堂に座つて思索する僧の「澄める心」の光りを、有明けの月は月自身の光と思ふだらうといふ風であります。

と解説しながら、実は己の

註六

例へば野に一輪の白百合が咲いてゐる。この百合の見方は三通りしかない。百合を認めたときの気持は三通りしかない。百合のうちに私があるのか、私のうちに百合があるのが、または、百合と私が別々にあるのか（中略）百合と私が別々にあると考へて百合を描くのは自然主義的な書き方である。古い客観主義

である。これまでの文芸の表現はすべてこれだといつていい。ところが主観の力はそれで満足しなくなつた。百合の内に私がある。私のうちに百合がある。この二つは結局同じである。そしてこの気持で物を書き現さうとするところに新主観主義的表現の根據があるのである。その最も著しいのがドイツの表現主義である。自分があるので天地万物が存在する。自分の主観のうちに天地万物がある。といふ気持で物を見るのは主観の力を強調することであり主観の絶体性を信仰することである。ここに新しい喜びがある。また、天地万物の内に自分の主観があるといふ気持で物をみるのは主観の拡大であり主観を自由に流動させることである。そしてこの考へ方を進展させると自他一如となり万物一如となつて天地万物は全ての境界を失つて一つの精神に融和した一元の世界となる。また一方万物の内に主観を流入することは、万物が精霊を持つてゐると云ふ考へ、云ひ換へると多元的な万有霊魂説になる。ここに新しい救ひがある。この二つは東洋の古い主観主義となる。かう云ふ気持で物を書き現さうとするのが、今日の新進作家の表現の態度である。他の人はどうか知らないが、私はさうである。

とかつて書いて以来深まりに深まつた一筋の文学精神、人間の心と無碍に融け合つた自然、日本古来の心情をもともどもに語つてゐるのであり、語り方そのものが既に融合であり、又題名の示す美しい日本の私なのである。日本と私なのではない。又更に

註七

「我にともなふ冬の月」の歌も長い詞書きに明らかのやうに、明恵が山の禅堂に入つて、宗教、哲学の思索をする心と月が微妙に相応じ相交はるのを歌つてゐるのですが、私がこれを借りて揮毫しますのは、まことに心やさしい、思ひやりの歌とも受け取れるからであります。雲に入つたり雲を出たりして、禅堂に行き帰りする我の足もとを明るくしてくれ、狼の吼え声もこはいと感じさせないでくれる「冬の月」よ、風が身にしみないか、雪が身にしみないか、月よ寒くはないか。自然そして人間にたいする、あたたかく、深い、こまやかな思ひやりの歌として、しみじみとやさしい日本人の心の歌として、私はこれを人に書いてあげてゐます。

と云ひ又更に

註八

四季折り折りの美に自分が触れ目覚める時美にめぐりあふ幸ひを得た時には親しい友が切に思はれ、このよろこびを共にしたいと願ふ、美の感動が人なつかしい思ひやりを強く誘ひ出すのです。この「友」は広く「人間」ともとれませう。また「雪、月、花」といふ四季の移りの折り折りの美を現はす言葉は、日本においては山川草木、森羅万象、自然のすべて、そして人間感情をも含めての、美を現はす言葉とするのが伝統なのであります。

と云つて、日本の伝統的美意識を「雪、月、花」に語りつつ、明恵の歌を自然、そして人間に対するあたたかく、深い、こまやかな思ひやりの歌として「しみじみとやさしい日本人の心の歌」としてとりあげながら、川端自身の文学の心を語つてゐるのである。この他一休を語り、良寛を語り、伊勢物語、・枕草子・源氏物語に触れつつ新古今集に至り、永福門院の歌を[註九]「日本の繊細な哀愁の象徴で、私により多く近いと感じられます。」と述べてゐる。この講演正に川端康成の文学の結集であり、康成の心情の結晶を、精髄をあます所なく述べてゐると云つても差支へなからう。

註十

これはたしかに、すべてを人間化せずにはおかない西洋伝統の自然観でも、観察し分析しやがては支配すべきものとしての西洋近代の自然観でもない。川端氏は、はるかなる東の国からの賓客として、端的に日本の心そのものを土産としてさし出しているのだ。しかしそのさし出し方は驚くほど率直である。西洋の分析的理性を越えるものは、それにふさわしい仕方でだけ提示されうるであろう。もしそれがそのままに受けとめられないとしたら、川端氏がノーベル賞作家として選ばれたこと自体無意味に帰するであろうからである。「美しい日本と私」なるタイトル自体通常の意味では翻訳の技術をこえるものであるばか

りではなく、あの文章に用いられた言葉も概念も、およそヨーロッパのそれと異なるものばかりである。それはただ美的表象に訴えてわずかに直観的理解を可能にするだけのものである。川端氏はしかし、あの文章が、正式に招かれた賓客が正式にさし出すべき唯一のお土産であり、またこの唯一のお土産をさし出すべき唯一の仕方であると考えたのであらう。

と云ふ堀米庸三の言は端的にこの講演の核心をついたものであり、その「日本の心」を川端文学のあるひは川端の心情のと置き換へてもそのまま通じるであらう。其の表現の様式態度と一体となつた川端の心情そのものであるといふ点を端的についてゐるのである。ここに注意すべきは、世界の晴の場といふ時所と正に適切なる方法とをえて、東方の国から招かれた賓客が唯一のお土産として、その心を語るに当つて明恵上人の心を語つたことは、その心情に明恵のしめる重みがいかに重いかを語るものであると云ふことである。ここにおいて明恵の心に逆ふものは亦川端の心情にそぐはないものとすることが出来るであらう。このことは特に着目しておきたいのである。

四

さても明恵上人とは如何なる人であるか。川端康成も

私は月があれば月を見る。しかし月を見ると、いつも日本のかなしさというようなものが身にしみる。月の古文学を思い出すからとはかぎらない。月や夜空そのものから感じるので、それはむしろなさけない自己嫌悪をともなう。もつとも身にしみたのはやはり戦争中の冬の月であつたろう。……鎌倉の家もまばらな小さい谷である。燈火管制で明りが一つもない。寝静まつた谷の冬の月は日本のかなしみで私を凍えさせるようだつた。このように日本の伝統を強く感じさせられたことはない。かなしみから伝統を感じるのも私のセンチメンタルな性だろうが冬の月は生涯私についてまわるだろうか。……その冬の月のころは、日本の歴史小説をいくつか書かうと考えていた。例えば、後鳥羽院や明恵上人を主にして定家や家隆などの歌人を配し、承久の乱のころとか、義政の子の美少年将軍義尚や宗祇などの連歌師を扱つて東山時代あるいは応仁の乱のころとか、利久に至る茶の人たちとか、いろいろあつたが、その後はほとんど調べるゆとりもないし、いつ手がつけられるやら分らない。……しかし書きたいと思つた昔の人にゆかりのあるものを近年は売りものの古美術品としてしきりに見ると、前に書こうと思つておいただけでもやはり無縁でないのは幸いである。明恵上人の「夢の記」の断簡や義尚という歌切（これは確かでない）などを書斎の押入れから出してながめていると不思議なかなしさを感じる……明恵上人を小説に書く時には明恵上人の書を床にかけて筆の合間に眺めていれば、それがなにか作品に働きかけることはないだろうか。

と「月見」に書いてゐる。ここに明恵上人の断簡といふのは全集第十巻あとがきに

博物館へ東福寺文化展を見に行つて、佐々木茂索氏らに出会ひ、やはり来合せた小林秀雄氏や森暢氏らと、新緑の高尾へ誘はれて行つた。東福寺の展覧会は立派な墨跡や頂相のほかに、伝楊補之の梅などもあつた。丹波焼と大雅とを見た。亀岡町へも二度行つた。古丹波の名品には驚いた。町の古美術商でも藤原の歌切や名品の根来を見た。明恵上人の「夢の記」の断簡を売りものとして見るのも、私にはなつかしかつた。

とあるものこれであらうか。してみれば既に戦時中より明恵上人のことは念頭にあつて、明恵上人の書を床にかけて明恵上人の小説を書きたいとさへ思つてゐるのである。ここにまた注目しておきたいのは、講演の最初も明恵上人の冬の月の歌であつたが此所にも冬の月に触発されて明恵上人を偲んでゐるといふ事もさりながら、明恵上人が後鳥羽院と共に、承久の変の中において執り上げられてゐることである。実はこの論において着目し問題にしようとしてゐるのは、官軍惨として戦敗れた承久の変の直後、あのいたましい京都の時代における明恵上人の言行にあるからである。又川端康成は「古都など」に次のやう

にも書いてゐる。

京都では二尊院の裏山に三条西実隆の極めてささやかな墓を見たのも私にはなつかしかつた。私は日本が戦い敗れてゆくあの年月のあいだ昔、承久や応仁の戦乱の世に新古今の文化や東山文化が興つて敗れたあとに心をひかれて、いくらか参考書を読み、藤原定家の日記の明月記や実隆の実隆公記なども読みそれらの戦乱のなかの文化のかなしみを小説に書いてみたくなつていた。定家も実隆ももちろんその小説中の人物である。怠け者の私は戦後十五年の間に、その材料調べも進めていないし、書けるほどの余命はないかもしれないが定家の跡や実隆の墓は通りかかりではすまぬ気持がいまもある。明恵上人の高山寺などもそうである。……

とにかく川端にとつては明恵上人の高山寺は通りかかりではすまぬ気持をいまも持つてゐるものなのである。道元禅師より二十七年先きに生れ、二十一年先きに亡くなつた明恵上人、華厳宗を中興した偉大な宗教家と云はれてゐる明恵上人とは一体如何なる人であるか。いま註十一「父祖の足跡」によつてこれをみよう。明恵上人は紀州の生れ、有田川の流城または其の近辺が生れ住した所である。無論上人は京に住み、高雄の神護寺に入り、栂尾の高山寺を開き、そのために栂尾の上人として有名であるが、一生の間しばしば紀州に下り、紀州との縁は至つて深い。而してその伝記は弟子高信の「高山寺縁起」によつても明かであるが、弟子喜海の書き残した「明恵上人行状記」それが別にやや形をかへた「明恵上人伝記」によつて一層精細になるのである。そればかりか喜海は明恵上人の遺蹟を一々調査してそこに標柱をたてたのである。上人歿後四年にしていかにも行きとどいた所置をしてゐるわけであり、今日上人の誕生地が分り胎衣塚の指摘できるのは喜海の心づかいのおかげである。明恵上人遺訓には

我は師をば儒けたし。弟子はほしからず、尋常は聊のことあれば、師には成りたがれども、人に隋つて一生弟子とは成りたがらぬにや

と云ふきびしい批判があるが殊に

人は阿留辺幾夜宇和（あるべきやうわ）と云ふ七文字を持つべきなり、僧は僧のあるべきやう、俗は俗のあるべきやうなり、乃至帝王は帝王のあるべきやう、臣下は臣下のあるべきやうなり、此のあるべきやうを背く故に一切悪きなり

とあるのは、人倫の秩序を立て、人生の道義を守らうとする志を述べたものとして注意すべきであり、高雄の草庵、世間との交渉絶え、虫の音しげき夕、月を雲まに仰ぎ、嵐を松の梢に聞いては、

うき世とぞ仏の法に説くのみか見る事ごとに何か常なる
世の中を棄てぬ身なりと思ひせば常なき事も悲しからまし

と歌つたが、人生の無常を痛感して、一切の名誉利慾の念を絶つたとは云ふものの、それは決して現世を否定するものでも無ければ、人倫を無視するものでも無い。僧は僧として山中孤独の生活に甘んじ仏道の修行に専念すべきであるが、僧で無い者は、あくまで此の世の秩序を重んじ、道義道徳に従はなければならぬ。帝王には帝王としてのあるべきやう、臣下は臣下としてのあるべきやうを守らねばならぬ。あるべきやうは規範であり、理想であり、準則である。さあ、かうなつてくると、深山幽谷に在つても、之を隠遁者と云ふわけには行かぬ。樹下石上に座しても、之を世棄人と見る事は出来ぬ、人生の道義道徳に無関心であり得ず、人倫の秩序に就いては、熱烈なる護持者とならざるを得ないのである。ここに明恵上人が時機といひ、対手（あいて）といひ、頗る劇的に現はれる時は、川端の云ふ承久の乱、承久三年であり、対手は北條泰時であつた。承久三年、後鳥羽上皇の鎌倉幕府を討つて、政権を朝廷へ取り戻さうとされる御計画は着々として進み、やがて五月十四日、幕府と緊密に連絡してゐる大納言西園寺公経とその子実氏とを禁錮し、あくる十五日官軍を発して京都の守護伊賀光季を討ち藤原光親に作らしめられたる北条義時追討の宣旨を全国に下された。光

季の急報は十九日正午鎌倉に着き二時間おくれて西園寺の飛脚も到着した。幕府の処置は目ざましく、彼等は第一便を得てただちに集合会議し応戦を決定、暮れ方には戦略を相談、北条泰時を総大将として十九万騎京に向つて進撃するのである。二十一日夕鎌倉を立つた泰時は、諸所に官軍を撃破し破竹の勢で六月十五日関東の主力は京都に入り戦を終るのである。あとは戦後の処分、戦後の処分は厳しかつた。後鳥羽上皇は隠岐へ流され給ふ。上皇すら此の通りである公卿は鎌倉へ呼び下されて、実はその途中で斬られる。一条宰相中将信能は美濃の遠山の荘に、中御門前中納言宗行は駿河の藍沢原に、按察使藤原光親は甲斐の加古坂に斬られた。官軍に属した武士に対しては遠慮会釈も無い京都に於いて即時死刑に処した。戦に敗れたほどみじめなものはない。官軍の将士身の措き所なく、中には栂尾山にのがれ自然明恵にすがる者段々あつた。明恵之を憐み、之を保護した。幕兵之を知り明恵を捕へ六波羅に引立てた。六波羅は泰時ここに在つて指揮する所。明恵上人伝記には

承久三年の大乱の時、栂尾の山中に、京方の衆多く隠し置きたる由聞えければ秋田城介義景此の山に打ち入りてさがしけり。狼藉の余り、何とか思ひけん、大将軍泰時朝臣の前にても沙汰あるべしとて、上人をとらへ奉りて、先に追ひ立てて六波羅へ参りけり。折節泰時朝臣、物沙汰して侍に坐せられけり。軍勢堂上堂下に充満せり。

とある。泰時は義景の報告を聞き、かねて其の高徳の噂を聞いて敬服してゐる上人が捕へられてゐるのを見て、大に驚く。

先づ仰天して、敬ひ畏つて席を去つて上に居奉る。

明恵は従容として云ふ。栂尾の高山寺に落人を多く隠して置くと云つての吟味であるが、いかにも左様でありませう。官軍の兵士を寺内に隠したといふ、いかにも隠した、それは当然の事である、殺生禁断の聖地であれば、鳥も救ひ、獣も救ふのである、まして人を救はない道理は無い、今迄もたしかに隠したが、今後も出来るだけ救ひたいと思ふ、それをいけないと云はれるならば、直ちに愚僧の首を刎ねられるがよい、と云ふのである。恐るる所なく、憚る所なく言ひきられて泰時は只驚嘆し、心服するのみである。幾重にも無礼を佗びて、帰りには輿を用意して乗せる。十九馬騎の総司令官常勝の威をほしいままにしてゐた泰時も六波羅に於ける明恵との対談には完全に敗れ驚き、此の高風に屈した。その驚嘆屈服は之を最初とするも次には之より数段きびしく烈しく実に彼の肺腑をえぐる批判である。それは彼栂尾山に登り明恵に謁した時の有名な明恵の

……一朝の万物は悉く国王の物にあらずと云ふことなし、然れば国王として是を取られむを、是非に付いて拘り惜まんずる理なし。……私に武威を振つて官軍を亡ぼし王城を破り剰へ太上天皇を取りて遠島に遷し奉り、王子、後宮を国々に流し、月卿雲客を所々に迷はし、或は忽に親類に分れて殿閣に喚び、或は立所に財宝を奪はれて路巷に哭する体を聞くに、先づ打ち見る所、其理に背けり、若し理に背かば、冥の照覧、天の咎め、無からんや、大に慎み給ふべし、おぼろけの徳を以て此の災を償ふことあるべからず……

の言之である。勝ち誇る関東の大軍の最高司令官武蔵守北條泰時草木もその前に靡き、人々は面を上げぬ。ひとり栂尾の哲人武力を恐れず猛威にたじろがぬ。その言ふ所正理なるが故に、万釣の重みがあり、之に打たれては泰時も木葉微塵とならざるを得ない、外には東士京都の内外に充満して、敗北逃走の官兵を捜索し、見つけ次第之を斬つて白刃拭ふに暇あらず、人馬の死骸道を埋めて、歩行に難儀をしたとは、吾妻鏡の記すところ、栂尾の寺内では、その最高司令官が耳も満足に具はつてゐない所の貧しい法師に叱られてこぼれ落つる涙をぬぐひつつあやまつてゐる。世にも珍らしく不思議なる光景と云はねばなら

ぬ。武力に恐れ、威勢に媚びる者は、同時に無力の者に対し傲り、悲運の人に向つては声もかけてやらないのが普通である。かやうなものを、卑怯といひ俗情といふ。さても明恵上人大将軍泰時に対しきびしく道を説さその無道をいましめ、いくさ敗れて逃げ散つた官軍将士をかばつて栂尾の山中に収容した。いやそれだけではない、ここに特に注目しなければならない事は官軍に属し、討幕の企に参加した為に、幕府によつて殺された人々の遺族を慰め、よるべなき人々を集めて、之を保護したことである。例へば鎌倉追討の宣旨を書いて斬られた光親の夫人禅恵尼、丹後守光氏の母理証尼いづれも明恵をたよつて仏道に帰したのであり、菊河の駅に宿つて、「昔南陽県の菊水は下流を汲んで齢を延べ、今東海道の菊河は西岸にやどり命を失ふ」と歌つて予期した如く数日後に斬られた中納言宗行の夫人も亦明恵をたより尼となり戒光と名を改めた。善妙寺をたてた明恵上人を請じ多くの女人を救つたのはこの人の力によるのである。其他明恵は関東のおもはくに頓着せず、占領軍の猛威に怖れず佐々木広綱の夫人をはじめとし凡そ危険にさらされ、悲歎に沈む、不幸な人々に同情して、その袖にすがる程の者を皆収容し、之に安全なるかくれ家と、心の支へとを与へた事である。昔をかへりみ今を見渡して是ほどの人物、外に誰があらう。その大勇大剛、その親切慈悲、前に類すくなく、後に例稀であらう。さればこの人の心はあたたかく、その目には涙があつた。川端の所謂日本のかなしみに通ふものがあるだらう。いやいやまだ明恵には注目すべき事がある。明恵は美しい島にあてて手紙を出すのである。

只その苅磨島の中にて、「栂尾の明恵房の許よりの文にて候」と、高らかに喚ばはりて、打捨てて帰り給へ

と使の者にいひつけて、島にあて、島にとどけた書状である。勿論原本は島へ届けられ風に散り海に流れ了つたであらう。しかし之を見た門弟は驚嘆して之を再読し三読したと見え、その概略を伝へてくれた。明恵上人行状記・明恵上人伝記に記されてゐるものである。

其の後、何条の御事候や、罷り出で候ひし後、便宜を得ず候て、案内を啓せず候、抑も島自体を思へば、是れ欲界繋の法、顕形二色し種類眼根の所取、眼識の所縁、八事俱生の体なり、色性即智なれば覚らざる事なく云々……

にはじまるもの、要するに島は心なき鉱物として我等とは別に、我等に対して存在するものであつて、それには知性も無ければ、感受性も無いものと、普通には考へられてゐるが、華厳の教理から見れば、一微塵の中に一切法界を見、ここに普く三世一切の諸仏事を現じ三世一切の仏転法輪を建立するといふのであるから、島は島でありながら、そのまま宇宙全体につながり、相互に融合し、相互に映発して、その間に何のこだはりも無く、さまたげも無い。悟りの世界は即ち法界であるが、現実の世界がそのままに法界に外ならず、その法界の一切が此の島に具備してゐるのであるから、島はそのまま毘盧舎那佛に外ならぬと云ふのである。毘盧舎那佛の法界に於いては過去も無ければ未来も無く、あるものは只永遠の現在である。そこには万物が、万物でありながら一つに融け合ひ、一つに融合しながらそれぞれの個性を発揮してゐる。何といふ美しい、何といふ貴い世界であらうか。といふのである。しばらくとんで

かく申すにつけても涙眼に浮んで、生滅無常の法門を心地にかきつくる心地す是に代けても恋慕の心をもよをしながら、見参する期なくて過ぎ候こそ本意なく候へ

とあり、しばらくして桜の話が出る

此の道理の前は、非情なりとても、恋しからむ時は、消足をもまいらせたし、凡そは御事のみに非ず、高尾の中門の脇に桜のあまた候中に、月なむどの明く候ひし夜は、常に語らひ遊びし桜の一本候が、境へだたりて常に見ざる時は、思ひ出されて恋しく候へば、消足なむどやりて「何事か有る」と申したき時も

候へども、物云はぬ桜の許へ消足やる物狂有りなむどと、よみ籠められぬべき事にて候へば、非分の世間の振舞に同ずる程に、思ひながらつつみて候なり即ち桜の木が恋しいので手紙を出して、「お変りありませんか」と尋ねたくは思うが、世間から狂人あつかひにされるだらうと思つて遠慮して出さないのだといふのである。続いて

然れども詮ずる所は、物狂はしく思はむ人は、友達になせかし

桜に手紙をやる事を、世間の人が笑ふであらうと遠慮して来たが、つきつめて考へるに笑ふやうな人間は、友達にせず、むしろ桜や島とつきあつた方がよいといふのである。なほ続いて最後に

取り敢へず候、併ながら後信を期し候、恐惶　　敬白

某　月　日　　高弁状

島殿へ

とある。上人には、その深き哲学から離れ、きびしき宗門を無視して、ふざけ戯れるといふ事は一時たりとても無かつたのであるから、島への手紙もすべて其の世界観の素直なる表明としなければならぬ。法界縁起の妙理心に浮び、唯識唯心の道理、さとりを開けば、万境隔なく、万物互に融合し、自他共に光曜映発する。明恵に於いて、島はもはや人間と隔絶せる無生物ではなく、踏み破らるべき鉱物では無い。究極して云へば、それも亦毘盧舎那佛に外ならぬ。その意味に於いて、我等と同胞であり、同格であり、従つて友としてよく、書状を贈つてよい。以上「父祖の足跡」の要約やや長きに失したが明恵の人となり、その行跡、心情の如何なるものか、又如何に川端康成の心情に通ずるもの多きかを概説したかつたからである。それによつて両者の愛と哀しみの心情を比較検討すべきであつたが今やその余裕なく、それはそれとして、ノーベル文学賞世界の注目を一身に集める光栄に耀き名誉あふれる授賞式、黒紋付の羽織着、袴を着用し文化勲章を胸に飾つた川端康成は、日本人としてもその體軀異常に矮少であり、つつましやかに、おだやかにかまへてゐるにもかかはらず、巨大漢ぞろひの北欧人の間にあつて威厳にあふれ、威風堂々として、あたりをはらひ、ひときは目立つたと云ふ。

註十二

ベコニヤの赤、そして黄菊白菊。しかし私にはそんな色彩は目に入らなかつた。先生の紋付の黒があざやかだつた。

と随行の北条元子は云ふ。しかもそれでゐて年若い女性の目には如何にも、あたたかく、やさしく、なつかしく、可愛くさへ感じられたといふ。註十三 北条元子の日記によると、どこに行つても川端の人気は抜群であり、町角には大きな写真がショーウインドーに飾られ、雪国・千羽鶴・古都などの翻訳本がその下に並べられており、町を歩けば、「オメデトウ、カワバタ」と人々が日本語で声をかける。女学生がサインを求めるといつた状態であつたと云ふ颯爽たること、そのかみ常勝の十九万騎を率ゐて京都に入つた関東の総司令官、北条泰時をしのぐものがある。さて奇妙なことかもしれないが、ここに考へたいのは此の川端をとつて京都における、いや高山寺における北条泰時と置き換へて考へられないかといふことである。あの明恵上人に驚嘆し、敬服し、心服した北条泰時とである。そして明恵上人と二重写しに出来ないかと云ふのである。さうすれば川端も明恵も時空を超越してその心情において冥合し、融合して、我々に迫つてくることが一層明瞭になつて来はしないかと云ふことである。川端康成が晴れのノーベル賞授賞式に正式の賓客として着用したのは大正天皇の御羽織であり、脊に負ひ胸につけ袖を飾つた紋所は北条ウロコである。この「日本の心情」を一途にうたいつづけた日本人は、明恵上人に敬服帰依した北条泰時の子孫なのであり、それを深く自覚してゐるのである。—未完—

註　一　新潮文庫本巻末解説
註　二　同前
註　三　京都文学散歩
註　四　同前
註　五　山陽新聞昭和四十三年十二月十七日。川端康成ノーベル賞受賞記念講演の全文。
註　六　文芸時代　大正十四年一月号　表現主義的認識論、なほこれについては羽島一英氏の論がある。（国語と国文学昭和四十一年三月号）
註　七　山陽新聞　昭和四十三年十二月十七日、註五に同じ。
註　八　同前
註　九　同前
註　十　毎日新聞、昭和四十四年一月二十日。東と西にかける橋。川端氏の記念講演の「心」。
註十一　文学博士　平泉澄著　時事通信社刊。
註十二　北條誠著　川端康成心の遍歴。二見書房刊。
註十三　同前

昭和四十四年三月三十一日出稿